(資料15)

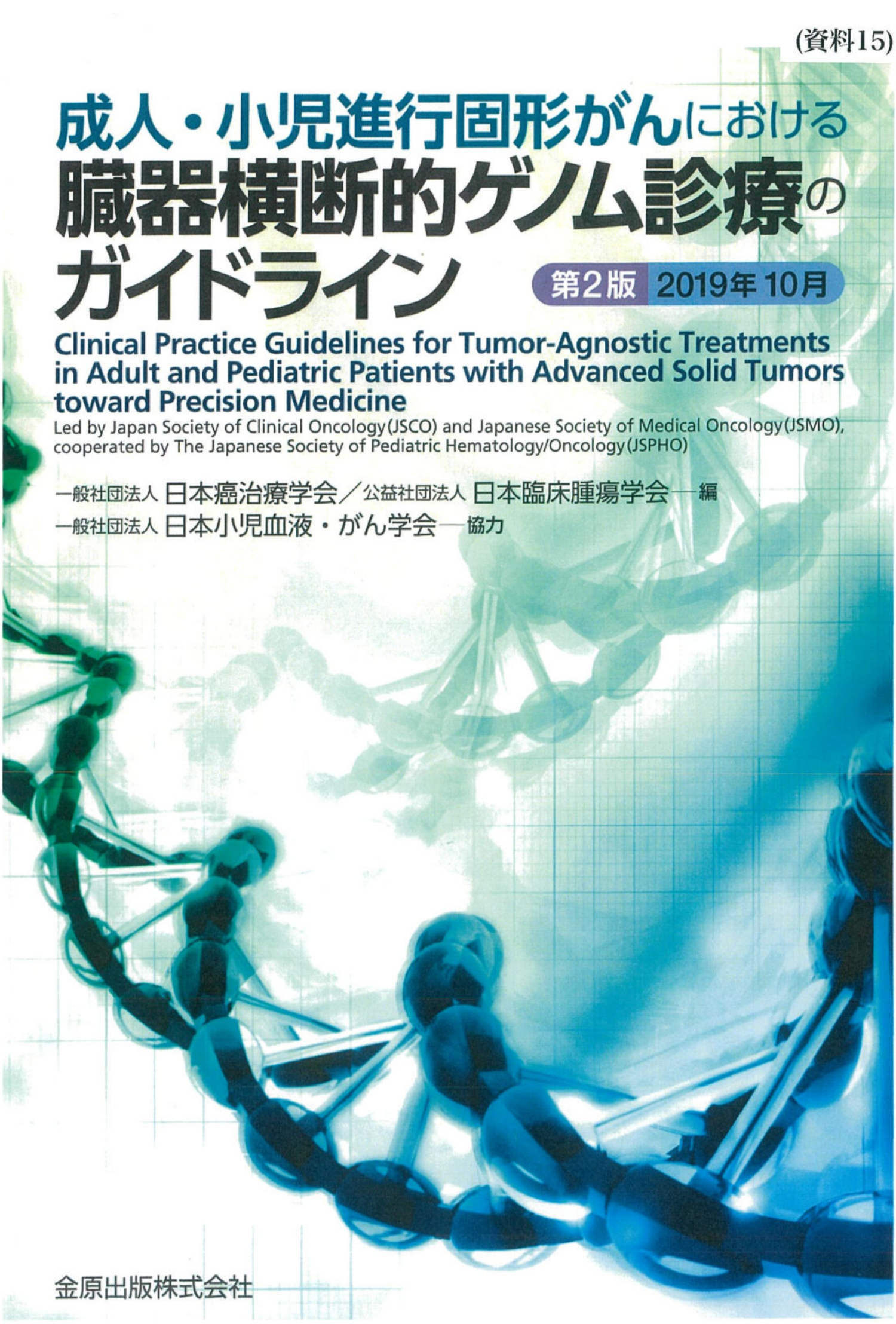
成人・小児進行固形がんにおける臓器横断的ゲノム診療のガイドライン

第2版 2019年10月

Clinical Practice Guidelines for Tumor-Agnostic Treatments in Adult and Pediatric Patients with Advanced Solid Tumors toward Precision Medicine

Led by Japan Society of Clinical Oncology(JSCO) and Japanese Society of Medical Oncology(JSMO), cooperated by The Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology(JSPHO)

一般社団法人 日本癌治療学会／公益社団法人 日本臨床腫瘍学会―編
一般社団法人 日本小児血液・がん学会―協力



金原出版株式会社

の際には考慮しないこととし，必要に応じて備考欄に記載した。Votingにより①SRが70%以上の場合にはSR，②①を満たさずSR+Rが70%以上の場合にはR，③①②を満たさずSR+R+ECOが70%以上の場合にはECO，④①-③に関わらずNRが50%以上の場合にはNRを全体の意見とし，①-④いずれも満たさない場合は「推奨度なし」とした。

なお，各CQに対する推奨について，現時点では強いエビデンスに基づかないものも含まれる。また，今後の新たなエビデンスの蓄積により，本文の記載および推奨度が大きく変化する可能性がある。本ガイドラインも適宜アップデートしていく予定であるが，実臨床における薬剤使用にあたっては，最新の医学情報を確認し，適切使用に努めていただきたい。

1.4 資金と利益相反

1）資金

本ガイドライン作成に関連する資金は，日本癌治療学会および日本臨床腫瘍学会により拠出した。なお，日本癌治療学会では厚生労働省・がん対策推進総合研究事業「希少癌診療ガイドラインの作成を通した医療提供体制の質向上」(研究代表者　小寺泰弘）より資金提供を受けた。

2）利益相反（COI）

日本癌治療学会・日本臨床腫瘍学会『成人・小児進行固形がんにおける臓器横断的ゲノム診療のガイドライン』第2版作成ワーキンググループのCOIについては，それぞれの学会において審査を行った。COIの詳細はviiiページからxiページを参照されたい。

サイドメモ　生殖細胞系列バリアント・二次的所見に関する用語の取り扱いについて

・最近は「変異・突然変異」(mutation）の代わりに「バリアント・多様体」(variant）が使われるようになってきている。例えばHuman Genome Variation Societyでは，mutationを使用せずに，variant（variation）という用語を用いることを宣言している。同様に多型(polymorphism）を用いないように宣言しており，今後は本邦でも「バリアント」を用いることが推奨される。

・がんゲノム医療で同定される生殖細胞系列バリアントについては「二次的所見」(secondary findings）の語が使用されてきたが，最近海外では「germline findings」と称される傾向にある。理由として①がん遺伝子パネル検査では「あえて」それらの遺伝子を検出している，②*BRCA1/2*やミスマッチ修復遺伝子の生殖細胞系列バリアントが同定された場合，それは治療標的となるため「一次的」ともいえる，③生殖細胞系列バリアントを保持している当事者が「二次的」と称されることに違和感を感じる，等が挙げられる。

本ガイドラインでは，現在広く一般的に使用されている「変異」・「二次的所見（secondary findings)」をあえて使用している箇所もあることに留意されたい。